

報 告 書

総務教育常任委員会は、令和7年11月11日（火）に視察調査を実施しましたので、その概要を別紙のとおり報告します。

令和7年12月5日

福井県議会議長  
宮本 俊 様

総務教育常任委員会  
委員長 力野 豊

## 総務教育常任委員会 視察調査 概要

- 1 視察年月日 令和7年11月11日（火）（日程は別紙のとおり）
- 2 出席者 別紙「総務教育常任委員会 行政視察調査出席者名簿」のとおり

### 3 視察先およびその概要

#### (1) 加賀市教育委員会（石川県加賀市）

加賀市立三谷小学校において、北市加賀市教育委員会 事務局次長 兼 学校指導課長 北市康德 様のあいさつの後、授業視察を行った。その後、資料に基づき概要説明を受け、質疑応答を行った。

##### ○「学校教育改革の取組について」

説明者：加賀市教育委員会 事務局次長 兼 学校指導課長 北市康德 様  
加賀市立三谷小学校 教諭 田中 美咲 様

#### (2) 公立大学法人福井県立大学 勝山キャンパス（勝山市）

福井県立大学 理事長 窪田裕行 様のあいさつの後、資料に基づき概要説明を受け、質疑応答を行った。その後、学部棟工事現場の視察を行った。

##### ○「福井県立大学恐竜学部の概要について」

説明者：福井県立大学 恐竜学部長 西 弘嗣 様

##### ○「学部棟の建設工事の進捗状況について」

説明者：福井県立大学 事務局長 宮崎 俊宏 様

### 4 質疑概要

別紙のとおり

# 福井県議会総務教育常任委員会 行政視察調査日程

令和7年11月11日(火)

時 間	行 程
9 : 3 0	議事堂 発 (バス)
1 0 : 2 0  (95分)	<p><b>加賀市立三谷小学校 着</b>                      (所在地) 加賀市直下町二ノ丙 73 番地                      (連絡先) 0761-72-7886 (加賀市教育委員会 学校指導課)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○現場視察</li> <li>○概要説明                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校教育改革の取組について</li> </ul> </li> <li>○質疑応答</li> </ul>
1 1 : 4 5	同地 発
1 2 : 3 5  1 3 : 3 0	昼食 (勝山市内)
1 3 : 4 5  (75分)	<p><b>福井県立大学 勝山キャンパス 着</b>                      (所在地) 勝山市村岡町五本寺 17 字 15 番                      (連絡先) 0776-61-6000                      (経営企画部 勝山キャンパス開設準備室)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○概要説明                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・福井県立大学恐竜学部の概要について</li> <li>・学部棟の建設工事の進捗状況について</li> </ul> </li> <li>○質疑応答</li> <li>○現場視察</li> </ul>
1 5 : 0 0	同地 発
1 5 : 5 0	議事堂 着 (解散)

総務教育常任委員会  
行政視察調査出席者名簿

【派遣委員】

委員長	力野豊	3期
副委員長	松崎雄城	2期
委員	山岸猛夫	7期
//	畑孝幸	5期
//	西本恵一	3期
//	北川博規	2期
//	渡辺竜彦	1期
//	中西昭雄	1期
//	中村綾菜	1期

(委員 計9名)

【地係議員】

福井県立大学関係  
勝山市選挙区

田中三津彦 2期

【議会局】

議事調査課 主任 関 碧  
// 企画主査 長谷川 将之

# 質 疑 概 要

## 1 加賀市教育委員会

### (1) 授業視察

概要説明前に加賀市立三谷小学校の各学級の授業を視察。

(※) 視察をしながら行った質疑応答については省略する。

### (2) 説明要旨

#### ○加賀市学校教育ビジョンの理念と背景

- ・加賀市の人口は約6万人弱であり、小・中・義務教育学校合わせて22校ある。多くの小学校は単級1クラスだが、複式学級を有する小学校も4校ある。少子化の影響は顕著であり、加賀地区で唯一、消滅可能性都市とされている。
- ・教育に対して並々ならぬ思い入れがあった前市長は、2022年に文部科学省から教育長を迎え、翌年に「加賀市学校教育ビジョン”BE THE PLAYER”」が誕生した。
- ・「BE THE PLAYER」は、直訳すればプレイヤーであれという意味であり、教師主導の一斉授業から子ども主体の授業への転換を図るものである。子どもたちが自ら学びに向かう主体的な姿勢を育むことを目的としている。
- ・市民への浸透を図るため、学校教育ビジョンのリーフレットを市内全戸に配布した。

#### ○加賀市学校教育ビジョンの内容

##### <プロジェクト1 学びを変える>

- ・「「そろえる」教育から一人ひとりを「伸ばす」教育へ」という目標を掲げ、教師主導型から子どもが主役で全員が参加する授業への転換を強く打ち出している。
- ・市教育委員会のこだわりの一つとして特定のモデル校は設けず、市内の小中学校の全教職員が一体となって取り組む方針を貫いている。新しい試みであるため失敗も学びの一部として捉えており、策定時から今に至るまで試行錯誤の連続である。
- ・カリキュラムは国の指針に準拠し、特別な内容は導入していない。授業スタイルは変わっても教員の役割は変わっていない。大きく変化したのは、1・2年生から1人1台のノートパソコンを日常的に活用している点であるが、紙教材も積極的に活用している。
- ・教員は、子どもたちが自己選択・決定・調整し、自立した学び手になることを重視し、子どもが自分の力を発揮できる環境設定に注力している。教員が意識的に学び方を変えることで、子どもたちはそれぞれ自ら学ぼうとしていくことが少しずつ分かってきた。
- ・教室は、課題に応じた自由な空間で学べるよう空き教室にカーペットを敷くなど、空間デザインを意識して工夫している。現在、クラウドファンディングによる資金調達によって取組を加速しようとしている。

#### <プロジェクト2 誰一人取り残さない>

- ・市内全校に学校内サポートルームを設置し、不登校児童を支援している。利用者は1日平均33人で、各校に支援員1人を4時間配置している。市内の児童生徒約4,000人中約200人が不登校で、増加傾向は昨年度にようやく収まった。
- ・児童のパソコンにはチャットで24時間対応可能な相談アイコン「ブリッジ」を設置している。昨年度に導入し、今年度上半期で約1,300件の相談があった。深刻な案件は市教育委員会が対応し、そのほかは認定NPO法人カタリバに委託している。

#### <プロジェクト3 未来は自分で創る>

- ・小1から中3まで、ICTを活用した教科横断型のSTEAM教育を一貫して実施している。現場の教員では対応がまだ難しいので、市教育委員会が研修を実施し、ICTサポーターを派遣している。
- ・テクノロジーの専門家の育成ではなく、技術革新が身近な現象であることを子どもたちが理解することを重視している。

#### <プロジェクト4 地域と一緒に>

- ・部活動の地域展開とコミュニティースクールを全校で実施し、3年目を迎えている。

#### ○加賀市学校教育ビジョンの成果と今後の展望

- ・一斉授業では見られなかった、子どもたちが夢中で学ぶ姿が高確率で見られるようになった。大人が学びを変えれば子どもも夢中になるし、自ら学びを変えていくことを実感している。学校教育ビジョンは数値目標ではなく、あくまでも子どもたちの主体性と学びの姿勢を重視する方向性を示すものである。
- ・教員が自分の姿が子どもたちに鏡写しされていることを認識し、当事者意識を持って取り組むようになったことが成果であり、今後の課題でもある。

### (3) 質疑概要

○委員 前教育長は2022年10月の着任後、わずか3か月後の2023年1月には学校教育ビジョンを発表したが、まずは教員が変わらなければならないという理念をどのように浸透させたのか。

○次長 学校教育ビジョンは前教育長がほぼ一人で構想したものであり、コンサル等の関与はなかった。発表当時、私も現場にいたが、反発はあまりなかったと感じている。その要因は、現場の教員も納得する説明であったこと、文科省の方向性とも一致しており、現場でも違和感なく受け入れられたことだと考えている。市教育委員会からは、学びを変える理由についての丁寧な説明があった。

また、子どもの未来も今も幸せにする、人生100年時代に対応できる学びが必要という理念が共有され、今は我慢して将来幸せになるという従来の考え方からの転

換が図られた。AIやネットの普及により、大人がすべて教えるのは困難であり、子どもが自分で学び、自分で人に頼る力を育む必要があることも強調されていた。

○教諭 教育委員会が視察ツアーの実施などにより事前にイメージを共有してくれたので、混乱は特になかった。

○委員 教員側の意識や子どもへの接し方はどのように調整したか。

○次長 教室には発達に課題のある子、突出してできる子、日本語教育が必要な子など多様な児童がいる。一斉授業では真ん中の層しか対応できず、限界があると現場の教員たちも感じていた。夏の全体研修で教員が共通の課題に直面していることを確認し、みんなで乗り越えていこうと思えるようになった。

現在も一斉授業は残るが、子どもたちの様子が少しずつ変わってきたという実感を伴ったことから、教員の意識は大きく変わってきている。

○委員 学校教育ビジョンの冊子を市内全戸に配布したとのことだが、予算措置や議会への説明、市民の反応について伺いたい。

○次長 議会の反応については、予算は約1億4,000万円であるが、給食無償化のほうが予算額は大きいので反発は特になく、理解は得られたと思う。

地域や家庭の反応については、こんな勉強でいいのかという問い合わせはあるし、全員が賛同しているわけではないのであろうが、市民が大聖寺駅前に学校教育ビジョンの看板を自費で作ってくれるなど、一定の理解は得られていると感じている。

○委員 この部屋の大型モニターも学校教育ビジョンに伴って導入したのか。

○次長 これは複式学級のある学校に導入している電子黒板であり、遠隔授業のために活用している。

○委員 製造業の企業はトップダウンで、同じ方向で考えて進むことが求められるので個々の独自性は必須ではないが、これに対応できる教育はできているのか。

○次長 カリキュラムは統一され、同じような授業を行っている中で、学校は先生のものではなく子どもたちのものであると意識を変えているのであって、バラバ

うな子どもたちをつくる教育をしているわけではない。学びの場を多様に設けることで、多様な子どもたちがそれぞれの形で学びにつながるよう工夫している。

○委員 授業の具体的な作り方や、これまでとの違い、工夫している点について教えていただきたい。

○教諭 学習指導要領では「つきたい力」というものが設定されているので、それを起点に授業を作っている。以前の一斉授業では課題、まとめと流れが決まっていた。今も課題とまとめはあるけれども、教員が主導するのではなく、子どもが必要に応じて友達に聞いたりヒントカードを使ったり、早く終われば次の課題に取り組むなど、自分に合った学び方を選べるようにしている。全員に力をつけつつ、個々の学びが深まるような環境を準備することを意識している。

○委員 小学校ごとの独自性を尊重する中で、各小学校の子どもたちが中学校に進学して一緒になるときのために配慮していることはあるか。

○次長 中学校に対して、小学校での学び方に合わせることは求めている。中学校でもそれほど混乱が起きることなく過ごせている。一番大事にしていることは自分で学ぶ力を育てることであり、これが将来の自立につながると考えている。小学校ごとの独自性を尊重することは、あくまでも方法であり目的ではない。小学校間でスタイルに差はあるが、それでもいいと考えている。

○委員 先ほど見た3・4年のクラスは、3年生が7人、4年生が1人であった。先生が3年生に指導している間、1人しかいない4年生の子はどのような学習を行っているのか。来年度は5年生1人、6年生5人という体制になると思うが、どうなっていくのか。

○教諭 来年度も5・6年生で複式学級であり、今の5年生4人と合わせても5人と、さらに少なくなる。1対1だと学びの広がりや多様な考えが生まれにくいので、ICTや具体物を活用するが、学年が上がるにつれて難しさを感じている。

○委員 一斉授業では置いていかれる子が多少いても仕方がないという雰囲気があったが、個別学習では一人一人に対応する必要があり、先生の負担が増えるのではないかと懸念している。子どもにとっては良いが、人手不足の現状において教

員数がさらに必要になる可能性があり、その点についての考えを伺いたい。

○次長　今でも一斉授業はあるし、一斉授業でも準備はあるので、個別学習になっても準備量はそれほど大きくは変わらない。さらに、デジタル化により教材を資産化できるため、それほど準備に追われることもない。

教員数は多いほうが望ましいが、限界があるので、自分たちで学ぶことはできないかについては一斉授業でも個別学習でも共通した課題であるが、一人で学んだり、みんなで学んだりできればいいと考えている。今の悩みは、男女分け隔てなく学んでほしいが、どうしても友達同士で学んでしまうことである。

○教諭　子どもの人数に関わらず、どの学校でも理解度に差はあるし準備の負担も基本的に変わらない。ただし、授業中の理解状況の確認作業は人数に比例して増えるので、この点については人数が多い学校ほど大変である。

○委員　従来の一斉学習では、学力テストの点数などでK P Iや成果指標が見えやすかった。しかし、現在の個別学習は考え方を学ぶことが目的で、子どもの成長が見えにくいのではないかと感じるが、この点についてどのように考えているか。

○次長　配付した黄色のリーフレットは昨年度の成果を報告する資料であり、ここではテストの点数ではなくコメントでお示ししている。ただ、子どもたちの様子が変わっても、その変化を数値化するのは非常に難しく、悩ましい課題である。

○委員　この学校教育ビジョンにより教員たちが目指すものと子どもたちが目指すものの接点はどこにあると考えているか。学校教育ビジョン1年目である2023年に小学校6年生だった子どもたちは、この学びを1年間しか経験していないが、高校進学後にどう影響するか。教員の立場では、この教育を受けた子どもがどれくらい国公立大学に合格できるのかという視点もあると思う。満足度と目指す方向の違いをどのように考えているか。

○次長　実際に自分の息子も中学3年生の時にこの学びを経験しているが、高校進学にブレーキがかかることはなかったし、進路選択への影響はそれほどないと感じている。子どもたちに必要なのは充実した学びであり、重要なのは子ども自身が主体的に学び、それを周囲に認められることである。キャリア教育における幸せの形は以前より多様化しており、子どもたちがどんな状態でも学びに向き合えること

が大切だと考えている。

○委員　フリースクールに通っていた子どもが三谷小学校に来て、他の子どもと一緒に授業を受けているということに感心した。その子はみんなと一緒に中学校、高校へ進めるレベルになっているのであろうか。

○次長　その子はまだ小学校中学年なので、今後どうなるかは分からないけれども、今は通信制高校の人気も出てきて、点数不足で進路が閉ざされる時代ではないので、本人の意思があれば学力に関係なく高校進学も可能だと考える。

○委員　現在の不登校者の人数を考えると、今後は学校内サポートルームだけでは対応しきれない時代が必ず来ると考えている。今後、不登校支援においてメタバースの活用は重要だと考え、教育委員会に対して提案もするのであるが、なかなか進まない。加賀市におけるメタバース開設の現状はいかがか。

○次長　ひきこもりの子どもたちと何とかつながろうと、昨年メタバースを開設した。9月1日は特に自殺者が多いので8月末に開設したが、利用者は4,000人中1人のみであった。その子は学校につながったが、現在はほぼ開店休業状態である。不登校に特化しているため利用は少ないが、こうした取組は必要だと考えている。

○委員　加賀市では全小学校でフッ化物洗口を実施しているそうであるが、全小学校でのフッ化物洗口実施の経緯を教えてほしい。また、導入前後の学校現場、保護者の方々の反応について聞かせてほしい。

○次長　加賀市では、児童の虫歯率、未治療率の両方が高いことが課題であったことから、歯科医師の助言を受けて、2024年9月から保育園と小学校でフッ化物洗口を開始した。

開始前には説明動画を作成して市教育委員会のホームページに掲載したほか、管理職と保健主事向けの説明会を3回、保護者向けの説明会を2回実施した。導入当初は、現場の教員たちの間では「現場は忙しいのに」という空気は満載であったが、今は慣れてきた様子である。大多数の保護者の反応は普通であった。全員強制ではなく希望制で実施する中で、誤飲は4件ほどあったが、マニュアルに従い特に大きな混乱もなく運用されている。

## 2 公立大学法人福井県立大学 勝山キャンパス

### (1) 説明要旨

#### ○福井県立大学恐竜学部の概要について

- ・福井県は 30 年以上にわたり恐竜化石の発掘・研究を進め、恐竜時代の環境解明に取り組んできた。また、水月湖の年縞や東尋坊など、日本列島形成史を物語る地質遺産を有する。この環境を活かし、日本初の恐竜学部を設置した。世界的な研究拠点として人材育成を進め、福井県のブランド力を高めることを目的とする。
- ・今年度の入学者数は県内 6 名、県外 28 名の合計 34 名で、定員 30 名を若干上回っている。取得学位は学士（理学）である
- ・1 年次は永平寺キャンパスで教養科目と地球科学の基礎を学び、2 年次以降は勝山キャンパスで専門科目を履修する。3 年次からは恐竜・古生物コース、地質・古環境コースに分かれ、4 年次に卒業研究を行う。取得可能な資格は高等学校教諭一種免許状（理科）、測量士補、学芸員である。
- ・恐竜学部の特色は、①福井県立恐竜博物館との連携、②フィールド科学の実践、③デジタル技術を活用した新分野の展開、④国際的視野に立つ教育・研究の 4 点である。
- ・卒業後の進路は、博物館学芸員、研究者、教員などの専門職をはじめ、地質・古生物コースで培った知識を活かし、土木職の公務員、地質・土木・建設産業など野外科学を必要とする職業を想定している。こうした分野は全国的に人材不足であり、恐竜学部はその供給源となることを目指している。また、環境アセスメント産業や自然科学関連の観光業、IT 分野も対象である。さらに、大学院進学を希望する学生にも対応し、専門性を深める道を開いている。
- ・最終的な目標は、県内で就職しながら生涯にわたり恐竜を楽しめる学部をつくることである。卒業後に異なる職業に就いても、恐竜学部や恐竜博物館を通じて福井県に住みたいと思える環境を整え、地域を盛り立てることを学部構想の基本に置いている。

#### ○学部棟の建設工事の進捗状況について

- ・令和 3 年度に実施したプロポーザルには約 20 社が参加し、設計監理者は隈研吾建築都市設計事務所に決定した。総整備費用の予算は約 42.4 億円であり、令和 6 年 6 月 13 日に工事に着手した。
- ・建物は本体部分が 3 階建て、ホール・アプローチ部分は 1 階から 3 階までの吹き抜け構造である。外壁は地層をイメージした仕上げとなっていて、昨年 10 月に外壁模様を形成した。
- ・工事工程に最も影響したのが、令和 7 年 2 月の 2 回の降雪である。2 月は基礎工

事のコンクリート打設の時期であり、除雪作業や生コンクリートの搬入調整、作業員確保に時間を要し、当初計画よりも2か月程度の遅れが生じた。工事工程の進捗状況について、全体では現在約75%の工程を完了している。

- ・本体部分は本年6月から内装工事に着手し、約85%の工程を完了しており、12月中に完成予定である。本体部分の工事を優先的に行うなど、作業の効率化や工程の見直しを図るとともに、ホール・アプローチ部分の工事と並行して備品搬入を行うことで、予定どおり令和8年4月の供用開始を目指している。
- ・ホール・アプローチ部分は近々に屋根コンクリートを終えて内装工事に入るところである。約70%の工程を完了しており、2月中旬に完成予定である。

## (2) 質疑概要

○委員 学生の卒業後の進路として博物館学芸員や公務員などの具体例が示されたが、県内に残ってもらうための仕掛けや具体的な取組があれば教えてほしい。

○恐竜学部長 県内の土木協会や建築協会、地質業協会、測量業、IT関連企業などには既に挨拶に行き、地質協会に対しては講義の担当も依頼している。地質や地質コンサルタント、建築、土木業界は全国的に人材不足であり、紹介すれば採用してもらえる可能性は高いと考えている。いかに学生を県内に誘導できるかが今後重要であり、企業と学生の双方向での紹介に重点を置く。

大学院進学希望者も多く、企業が修士・博士人材を受け入れる仕組みも検討する。来年度から企業説明や学生紹介を本格化し、将来的にはOB会等を通じ、職業に関係なく恐竜を楽しめる環境を整え、福井県に住みたいと思える仕組みを目指す。

○委員 教員体制と研究室数、その専門分野はどのようなようであるか。

○恐竜学部長 学部設置には文部科学省の審査があり、教授7名の確保が必須であった。教授の構成は、就職に直結する地質・環境分野で過半数を占め、恐竜分野は恐竜研究所の研究員が担当する。研究室は4つ程度で、地質、環境、恐竜、デジタルの4分野を柱とする。デジタルは全分野に関わり、横断的な役割を担う。こうした配置により、学生の専門性と就職機会を確保する体制を整えている。

○委員 恐竜の研究室に希望が集中して、学生の希望に沿わないような状況にならないかを危惧しているが、なるべく学生の希望に沿うことができるように頑張ってもらいたい。

○恐竜学部長 その点については我々もある程度配慮している。恐竜研究者になるには大学院進学が必要であるが、恐竜を研究したくて入学したのにそれができないのでは本末転倒なので、大学での4年間で恐竜に触れる機会を多く設けることを重視している。講義や実習、野外活動を組み込み、恐竜に関する体験を十分に提供する。カリキュラムは表の講義科目に加え、実習や体験型科目を織り交ぜ、全員が4年間恐竜を扱ったという満足感を得られるよう設計している。

○委員 有名設計事務所が担当すると工事が遅れる傾向があると聞く。一乗谷朝倉氏遺跡博物館でも同様の事例があり、設計士は年に数回しか来ない上に、設計変更が大きな負担になった。隈研吾氏設計の学部棟は、ホール・アプローチ部分の工事が終わらないのではないかと聞くが、実際に2月までに完成するのであろうか。

○事務局長 確かに、隈研吾先生のご指示に地元の工事業者が大変苦慮しているということも相当以前には聞いたこともあったが、先ほども説明したように本体部分は年内、ホール・アプローチ部分は2月中旬完成予定であり、現時点では問題ないと考えている。

○委員 恐竜博物館はぴかぴか光っているのに学部棟は木造風であり、外観がアンバランスに見えるが、なぜこのようになったのか。恐竜博物館ができるときにもその外観について議論はあったが、環境面の配慮についても学生に学ばせてほしい。

○事務局長 学部棟は地味ではあるが、恐竜学部ということから地層や古代をイメージした外観であるが、構造は鉄筋コンクリートで非常に頑丈である。内部は県産スギ材などの木材をたくさん使用して温かみを持たせている。

○理事長 恐竜博物館は入札ではなくデザインコンペで選定された。4階建ての白亜の塔など複数案が検討されたが、銀色の卵型建物を囲む巣のような外観が一番周囲の景観と調和するという理由から、このデザインが採用された。街や中部縦貫道からの景観に配慮し、長尾山全体の環境に合わせることを目的としている。

### (3) 現場視察

説明および質疑応答終了後、学部棟の建設工事現場を視察

(※) 現場視察をしながら行った質疑応答については省略する。

総務教育常任委員会 行政視察  
(加賀市教育委員会(加賀市立三谷小学校))



総務教育常任委員会 行政視察  
(福井県立大学 勝山キャンパス)

